様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　２２年　４月１２日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２００７～２０１０
課題番号：１９７００４８８
研究課題名（和文）　「他者との身体的地盤を生成する体育」の理論的根拠に関する研究

研究課題名（英文）　An Investigation for the Theory of Physical Education based on Physical foundation toward Other

研究代表者
石垣　健二（ISHIGAKI KENJI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：２０３３１５３０

研究代表者の専門分野：体育哲学，体育科教育学
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学
キーワード：体育哲学，他者，身体的地盤，間主観性，間身体性

１．研究計画の概要

(1) 本研究究課題の目的は，他者との身体的地盤づくりを促進するための教科として「体育」を措定し，「自己-他者」間において身体的地盤が生成する理論的根拠を明らかにすることである．

(2) 上記の課題を達成するために，まず①哲学分野の著作について，主に現象学的身体論・現象学的他者論を参考にする必要がある（哲学関係図書の購入・文献複写）．現象学が体育現象の説明に適していると思われるのは，それがその性格からして，心的現象以前の事象の解明にとり組む学問分野だからである．それら現象学の思想によって，身体という働きがいかにして人間の根源的部分を担っているかを検討し，それが道徳性という領域においてさえも関係するという着想を得る．また，②教育学・教育哲学の分野において，「学習規範論」や「自他関係論」を展開している研究を中心に文献の読解をおこない，教育という「教える-学ぶ」関係（他者との関係）において、そこで何が生じているのかそのメカニズムについて把握する必要がある（教育学・教育哲学関係図書の購入・文献複写）．最近教育学の分野においては，発達論的立場からでなく，生成論的立場から学習者を理解する方法が提案されている．これは、段階的・システム的教育からの離脱とも捉えられ，特に身体的次元を媒介にしておこなわれる体育という現象を説明するためには，このような生成論が有効に適用されるものと思われる．さらには，③体育・スポーツ哲学の分野において今まで展開されてきた道徳論議や倫理学説を批判的に読み進め，それらの論議を整理するとともに，その限界を見定める必要がある（体育・スポーツ哲学関係図書の購入・文献複写）．日本では「体育における人間形成論」が，そして，欧米においてはスポーツ教育論の思潮にのり，スポーツによるさまざまな道徳性の獲得が論じられてきたが，それらが単に希望的観測にすぎなかった事実を文献のなかから探ることとなる．これらの研究から、申請者が主張しようとする「身体的次元から道徳性に接近する」ための着想が得る．

(3) 上記の文献考察をすすめながら，諸学会に参加・発表し，関係研究者に内容の是非を問うてゆく．

２．研究の進捗状況

(1) 19 年度前半は、体育における「教える-学ぶ」関係を検討しながら，そこで獲得されうる超越論的他者という視点を案出し，それが身体的な「われわれ」の基礎となる可能性を示した．後半は，身体性と道徳性（心性）との関連に着目しながら，道徳的行為と身体性の問題がいかなる接点をもちうるかについて検討した．道徳教育において決定的に不足するのは，実際の「経験」である．経験とは，心的な経験ではなく直接的な身体的経験であり，実践へと繋がるような経験である，今後、こうした身体的経験の内実が何であるかを吟味する必要がある．その内実が，身体的地盤（間身体性）であるならば，それが成立する構造を明らかにしなければならないことになる．

(2) 20 年度前半は，自己と他者との間に身体的地盤が生成するためには，まず他者との友好関係が問題にされる必要があると判断し，そこでの身体的経験について考察が深め

られた．このことと関わり，後半では「身体的対話」あるいは「身体的」ということの意味を問いながら，そこで注目されるべき概念として「身体的感じ kinesthetic feeling」を提起することとなった．

(3) 21 年度前半には，「他者との身体的地盤」という本研究の最も重要なキーワードを，哲学・心理学その他の領域で論じられる「間主観性」および「間身体性」の概念にもとめながら，それらに関わる文献を分析した．また後半においては，これら「身体性」や「間身体性」が人間形成という問題といかにしてかかわることになるのかを検討し，人間形成論に身体性の形成が抜けおちていることを明らかにした．

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している．

（理由）

「他者との身体的地盤」というキーワードを哲学・心理学その他の領域の「間主観性・間身体性」の問題としてとらえられたことは大きい．人文社会科学の領域で扱う人間関係・コミュニケーション・かかわりといった問題の多くは，この間主観性の問題といってよい．その問題の全体を身体の問題として検討する視点こそが，体育学独自の問題領域として設定しうる可能性があるだろう．その構造を問うことが最終年度の課題となる．しかし，それを体育の具体的な実践として展開する方法については，検討する時間が不足するかもしれない．

４．今後の研究の推進方策

引き続き，文献による考察を深めることが必要である．体育が間主観性でなく，間身体性を射程にして実践されるべきその根拠とその構造を探らなければならない．そのためには，体育の理論を批判的に検討しながら，それらが間主観性を射程にして実践されていることを論証しなくてはならないだろう．また，そのような体育実践ではなく，間身体性を射程にした体育が，一体いかなる体育となるのかを具体的に指し示す必要もある．それによって，他者との身体的地盤（間身体性）を生成する体育の構造が明らかになると思われる．間身体性を射程にした具体的な体育実践については，研究代表者本人が，本研究 2 年目に小学生を対象にして実験的授業をおこなった成果を，再度分析することを考えている．当該授業を再解釈することによって，新たな視点が発見されると期待している．

５． 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 石垣健二（2010）体育と間主観性・間身体性の問題：鯨岡峻の議論を中心にして，体育哲学研究，39，頁未定．（審査無）

② 石垣健二（2008）「道徳教育としての体育」序説：道徳教育（論）批判および身体的経験の必要性，体育・スポーツ哲学研究，30-1，27-45．（審査有）

③ 石垣健二，深澤浩洋，関根正美（2007）教科体育における「超越論的他者」の措定：身体的な「われわれ」の成立，体育学研究，52-4，327-344．（審査有）

〔学会発表〕（計４件）

① 石垣健二（2009.7.）体育学と間主観性・間身体性の問題：鯨岡峻の議論を中心にして，日本体育学会体育哲学分科会夏期合宿研究会（箱根静雲荘）．

② Kenji ISHIGAKI（2008.9.）Physical Dialogue and Intercorporeality in Physical Activity, 36th Annual Conference of the International Association for the Philosophy of Sport （国立オリンピック記念青少年センター）．

③ 石垣健二（2008.7.）体育における「超越的他者」：超越論的他者となにが違うのか，日本体育学会体育哲学分科会夏期合宿研究会（箱根静雲荘）

④ 石垣健二（2007.8.）道徳教育から身体教育（体育）へ：「心の教育」批判および身体的経験の必要性，日本体育・スポーツ哲学会第 29 回大会（東京学芸大学）

〔その他〕